



文 クリストフラー・ストックラス 写真 テイボー・ボワリエ

音を解き放つ

パイプオルガンは、取り扱いだけでなく、その構造においても、要求水準の高い、特殊な楽器のひとつだ。しかし、20世紀から21世紀にかけて、その大きさと複雑さが、この楽器の設計における創造性に拍車をかけた。



圧縮した空気を利用して音を奏でる鍵盤楽器、パイプオルガンは、産業革命以前に人類がつくり出した最も複雑な機械だった。今日でも、その製作には長い年月と膨大な時間がかかる。パイプオルガンの歴史は、古代ギリシャにまで遡るが、その黄金時代は、J.S.バッハと彼の同時代の作曲家たちが、この楽器のために崇高な音楽を作曲した17世紀から18世紀とされることも多い。しかし、20世紀に入ってから数々の素晴らしいオルガンが製作されている。

パイプオルガンの発展の歩みは長く複雑だ。もともとは宗教とは無関係の世俗的な楽器だったが、10世紀以降、ヨーロッパのキリスト教会で定着し、12世紀には典礼のなかで重要な役割を果たすようになる。国際的に高い評価を得ているオルガン奏者ジェイムズ・マクウィニーは、「オルガンは）人間と神の対話の仲介者と考えられていました」と言う。

16世紀以降、オルガンは国によってそれぞれ違った道をたどり、デザインだけでなく音色も大きく異なっていた。その違いは時を経るにつれて拡大し、楽器としての使われ方も多様化していく。

19世紀末の四半世紀、作曲家たちは交響楽にオルガンを取り入れるようになり、1878年にはパリのトロカデロ宮殿にフランスで初めてのコンサートホール用パイプオルガンが設置された。初期に演奏されたシャルル・マリイ・ヴィドールの「オルガン交響曲第6番」は、カミーユ・サン・サーンスが1886年に作曲した不朽の名作「交響曲第3番」をはじめとする、フランスにおけるオルガン交響曲の火付け役となった。

オルガンは、オーケストラの大量と張り合うと共に、アンサンブルに匹敵する音域や表現力を求められるようになり、1890年から1920年代にかけて巨大化していく。1890年にオーストラリアのシドニー市庁舎に設置されたグラント・オルガンは、約9000本のパイプと5段の手鍵盤（パイプを制御する鍵盤）を備えているが、アメリカのニュージャージー州アトランティックシティにあるボードウォーク・ホールのオルガンは、この比ではない。1932年に完成したこの巨大なオルガンは、7段の手鍵盤に314個のストップ（パイプへの空気の流れを調整する装置）を備え、パイプの数は3万3112本にもなる。こうなると必然的に複雑さへの反動が生じるもので、その流れを牽引したのが、ノーベル賞受賞の医療宣教師でオルガン奏者でもあったアルベルト・シュバイツァーだ。1906年に彼は、バロックオルガンの「より純粹な」音色と単純な構造への回帰を訴えた。これに続くオルガン改革

運動（「オルゲルベヴェーグ」と呼ばれる）は、20世紀のオルガン設計に多大な影響を与え、古い楽器の修復や、17世紀から18世紀に作曲された、多声音楽の演奏能力が重視されるようになった。

しかし、ここに写真で紹介するオルガンは、すべて第二次世界大戦後につくられたものだ。戦争は甚大な被害をもたらしたが、オルガン製作者たちは、過去に学びながら音楽的、技術的な進歩を取り入れ、新しい楽器をつくるという、かつてない機会を得た。当時最も影響が大きかったのは、1954年にロンドンのロイヤル・フェスティバル・ホールに設置されたオルガンだろう。オルガン奏者で学者でもあったラルフ・ダウンズ

が設計したこのオルガンは、公費で購入されたため「納税者のオルガン」と呼ばれた。オランダのロッテルダムにあるデ・ドレーン・コンサートホールは、ロイヤル・フェスティバル・ホールの十数年後に建設されたが、両者は美的に類似している。1968年に建造されたデ・ドレーンのオルガン（写真40頁41ページ）とロンドンのそれとの間にも類似点が見られるが、オランダのオルガン製作者ディルク・フレントロップは、トランペットのようなパイプを水平に配置する、スペイン発祥ながらフランス語で「アン・シャマード」と呼ばれる様式をオルガンの最上部に取り入れた、独特なデザインを考案している。

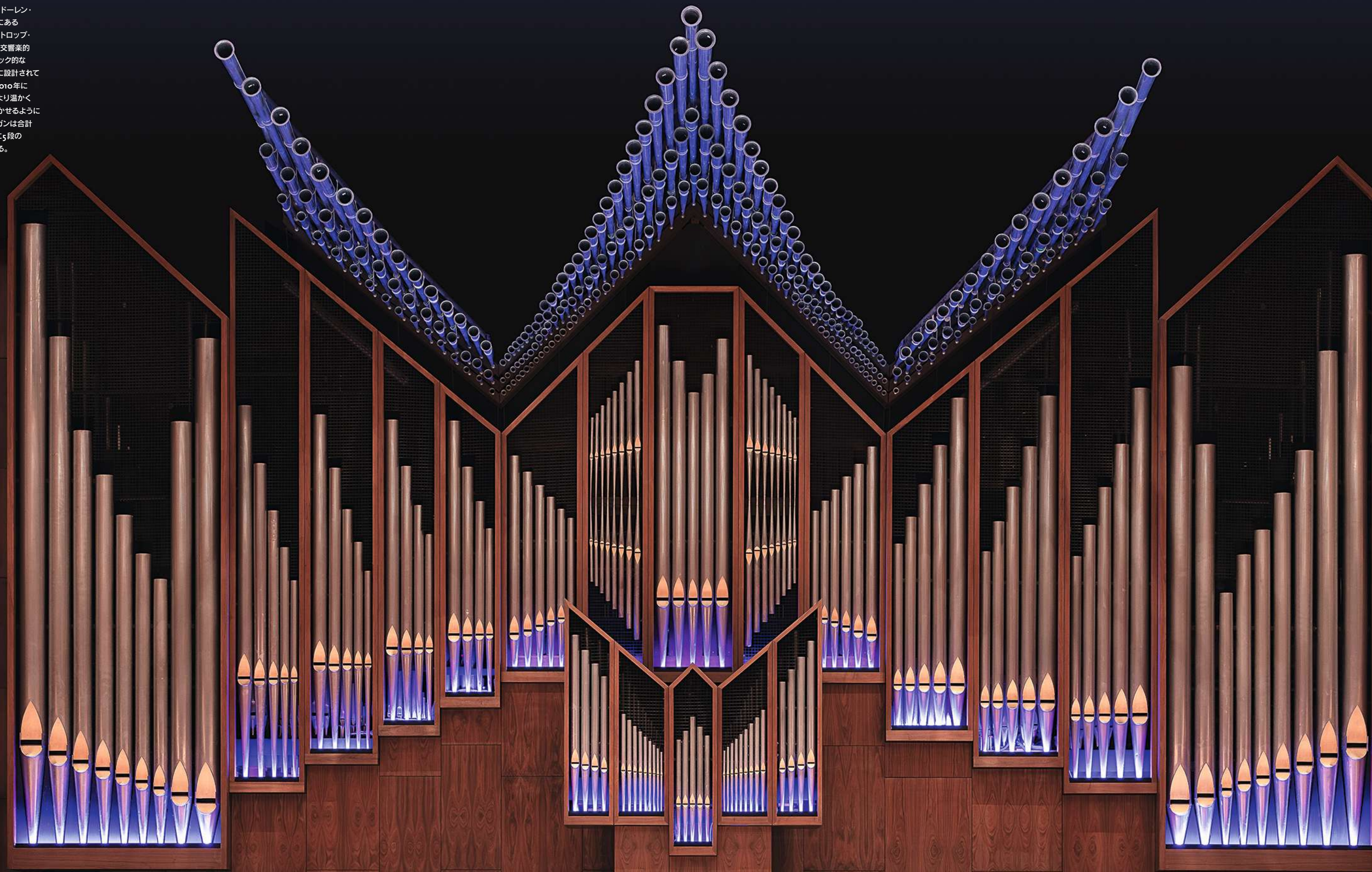
デンマークのエスピャウにあるデンマーク国立音楽アカデミーに設置された2002年製のオルガン（次ページ）にも様式的な共通点が見られるが、その音色やセッティングには、目を見張るものがある。エレガントな格天井を張った丸屋根を戴くこのコンサートホールは、1907年に発電所のタービン室として建設された。現在は、その卓越した音響効果とオルガンの素晴らしさで、オーロップで最も名の知られた室内楽ホールとなっている。このオルガンを製作したのは、マークセン&サン社（イギリス、マンチェスター）のブリッジウォーター・ホールに設置された5500本のパイプを持つオルガンを製作）で、同社で経験を積

パイプ（当ページ）のうち最大のものは高さ5mになる。[次ページ]デンマーク、エスピャウにある国立音楽アカデミーのオルガンは同校ホールのために2002年、マーカッセン&サン社が受注製作したもの。44個のストップレバーと

2828本のパイプを備え、オルガン中央部の星形のツインベルシュテルン・ストップは、取りつけられた数個のベルを鳴らす。筐体には、19世紀にデンマーク王立海軍の艦船用に栽培されたデンマークのネイビーオーク材が用いられている。



ロッテルダムのデ・ドレーン・コンサートホールにある1968年製のフレントロップ・オルガンは、当初、交響乐的ではなく、ネオバロック的な音色を奏できるように設計されていたが、2004～2010年にかけて改修され、より温かく深みのある音を響かせるようになった。このオルガンは合計5000本のパイプに5段の手鍵盤を備えている。





1968～1970年にかけて、フランスのスキーリゾート、アルプ・デュエズに建設されたノートルダム・デ・ネージュ教会のオルガンは、1978年に完成した。礼拝に集まる人々は、天窓の下に置かれたオルガンを中心に、半円を描くように座る。教会としては珍しく、演奏者の手元が見える配置になっている。

んだポール・ゲアハルト・アンデルセンは、スイスのジュネーブにあるサン・ピエール大聖堂のオルガンを収めた、ゴールドが効いた幾何学的な筐体を設計している(44ページ、45ページ右)。オルガン本体はチューリッヒのメツラー・オルゲルバウ社が製作し、1965年に完成した。その姿は、天使の羽を思わせる。

最たる例のひとつが、アルプス山脈高地のスキーリゾート、アルプ・デュエズのノートルダム・デ・ネージュ(雪の聖母)教会にある。灯台のような塔を持つ、ガラスとコンクリートでつくられたこの教会は、1976年に建築家ジャン・マロルが建てたもので、「神の手」を模したオルガンが設置されている。これはマロルがドイツのオルガン製作者デトレフ・クロイカーと共同で設計したもので、I組のパイプ群が4本の各指をも

最も革新的な現代オルガンのなかには、芸術家や建築家によってデザインされたものもある。

UI組のパイプ群が親指を形づくり、手のひらにはスウェルボックス(音量調節装置)という独創的な配置となっている(当見開きページ)。より新しいものとしては、パリ郊外ルベックのサン・ティボー教会に、建築家ダニエル・ケルンが2008年に製作したアール・ヌーボー風のオルガンがある(36、38ページ)。

最も革新的な現代オルガンのなかには、当然のことながら、芸術家や建築家によってデザインされたものもある。例えば、マヌエル・J・ロサレスが製作した巨大なオルガンは、フランスのスキーリゾート、アルプ・デュエズに建設されたノートルダム・デ・ネージュ教会のオルガンは、1978年に完成した。礼拝に集まる人々は、天窓の下に置かれたオルガンを中心に、半円を描くように座る。教会としては珍しく、演奏者の手元が見える配置になっている。

